

目的 第二次大戦後、日本人の衣生活に占める和服と洋服の比率は逆転し、日本は1945年以降、洋服の時代に入った。明治以来の和服改革の延長線上にあつた戦時服が、女子服装の洋装化を促す要因として大きく働いたこととを指摘したが、本報では今日もなお人々の生活の中に存続してゐる和服の用途とその意味について考察する。

方法 戦後の社会状況の變化に伴う生活の密着、特に都市型生活の一般化、工業化社会から情報化社会への移行等に関する文献を基礎資料とし、和服関連の業界誌、ファッション誌、学校教育のカリキュラム等によつて和服の動向を把握すると同時に、今日の和服着用の実状を明らかにするために、関西地方に於ける和服関連業界の調査を行った。

結果 戦時服とその家種によるアメリカ風俗の流入は、日本人の生活文化を急激に洋風化した。戦後の都市構造や住宅様式に西欧風が採用されたことは時期は、明治の文明開化にも匹敵する第二次大戦後の大改革期と云つてよい。服装上の變化もこれに対応したもので、和服は限られた場と場所、人によつて着用されるにすぎないものとなつた。しかし鉄砲準備のため多くの女性は何種類かの和服を準備するものが今日でも通例となつてゐる。このことはこれまでも言われてきた晴着と祭着の間に数寄着とびも呼ぶべき新しいカテゴリーの成立を示してゐる。和服の縫製や着付けが家庭から社会へ移行した今日、なお和服は存続させてゐる大日本要素は冠婚葬祭やその他の通儀儀礼、身中行事などの伝統的立場には伝統的洋服がふさわしいと見なされる一方、例えば、晴着でも祭着でもよい和服が、人々の芸能の場をのびに好ましい服装として受けとめられることによるものと考へられる。